

PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 58-082338

(43)Date of publication of application : 17.05.1983

(51)Int.Cl.

G06F 7/52

(21)Application number : 56-180788

(71)Applicant : NIPPON TELEGR & TELEPH CORP
<NTT>

(22)Date of filing : 11.11.1981

(72)Inventor : MIYAGUCHI SHOJI
TONE FUJIMITSU

(54) DIVIDER

(57)Abstract:

PURPOSE: To simplify a control part for a divider for $M \div D$ where M and D are integers, and to speed up division by applying multiplication to the calculation of a partial quotient.

CONSTITUTION: When a division start indication signal is inputted from a control signal line 12 to a control part 11, integers M and D are set in an Mj generation part 5 and a register 6 through a control signal line 41. Then when the integer M is expressed by equation I, the arithmetic 7 of a partial quotient Qj1 satisfying requirements shown by equations II-IV is performed with regard to $j=1, \dots, 2$, 1 to obtain the product $-Qj1 \times D$ by arithmetic 8. Then, a 4-input, 2-output carrier storage type adder 1 finds $Hj+Gj$; Hj is outputted to a register 2, and Gj is outputted to a register 3 respectively. The Hj and Gj from the registers 2 and 3 are supplied to a carrier propagation type adder 4 to perform addition, and the addition result is outputted through a signal line 34.

I
II
III
IV
V
VI
VII



LEGAL STATUS

[Date of request for examination]

[Date of sending the examiner's decision of rejection]

[Kind of final disposal of application other than the examiner's decision of rejection or application converted registration]

[Date of final disposal for application]

[Patent number]

[Date of registration]

[Number of appeal against examiner's decision of rejection]

[Date of requesting appeal against examiner's

decision of rejection]

[Date of extinction of right]

⑬ 日本国特許庁 (JP)

⑭ 特許出願公開

⑫ 公開特許公報 (A)

昭58—82338

⑮ Int. Cl.³
G 06 F 7/52

識別記号

庁内整理番号
2116—5B

⑯ 公開 昭和58年(1983)5月17日

発明の数 1
審査請求 未請求

(全 14 頁)

⑭ 除算器

⑰ 特 願 昭56—180788

⑱ 出 願 昭56(1981)11月11日

⑲ 発 明 者 宮口庄司

横須賀市武 1 丁目2356番地日本
電信電話公社横須賀電気通信研

究所内

⑳ 発 明 者 刀根藤光

横須賀市武 1 丁目2356番地日本
電信電話公社横須賀電気通信研
究所内

㉑ 出 願 人 日本電信電話公社

㉒ 代 理 人 弁理士 草野卓

明 細 書

1. 発明の名称

除算器

2. 特許請求の範囲

(1) 整数 M , D を入力して $M \div D$ の計算を行なう除算器において、 M を式 (S1) により表現したとき、 $j = 2, \dots, 2, 1$ について、式 (S2) ~ (S4) の条件を満たす Q_j' を求める演算手段と、 $-Q_j' \times D$ を求める演算手段と、式 (S3) の R_j を求めるキャリア蓄積型加算器からなる加算手段とそのキャリア蓄積型加算器からなる加算手段の出力を加算するキャリア伝播型加算器からなる加算手段と、式 (S5) ~ (S7) の条件を満たす δ を調べる制御手段をもつ除算器。

$$M = \sum_{j=1}^L M_j \cdot 2^{(j-1)\lambda}, \quad M_j = \sum_{\mu=0}^{\lambda-1} \delta_{(j-1)\lambda+\mu} \cdot 2^\mu \quad (S1)$$

$$\delta_{(j-1)\lambda+\mu} = 0 \text{ 又は } 1, \quad \lambda = 1, 2, \dots \quad (S2)$$

$$R_{L+1} = 0 \quad (S3)$$

$$R_j = 2^\lambda \cdot R_{j+1} + M_j - Q_j' \cdot D \quad (S4)$$

$$-t \cdot D \leq R_j < D \quad \text{但し } t \geq 0 \quad (S5)$$

$$R = R_1 + \delta \cdot D \quad (S6)$$

$$0 \leq R < D \quad (S7)$$

$$\delta = \begin{cases} 2 & R_1 < -D \text{ のとき} \\ 1 & -D \leq R_1 < 0 \text{ のとき} \\ 0 & R_1 \geq 0 \text{ のとき} \end{cases} \quad (S7)$$

3. 発明の詳細な説明

この発明は整数 M , D につき $M \div D$ の除算を行なう除算器に関するものである。

除算 $M \div D$ を行なうには M と D を 2 進数で表現し、 M の上位桁数ビットと D の上位桁数ビットを比較し、仮の商 Q_j を求め、その Q_j について $Q_j \times D$ を求め、更に $M - Q_j \times D$ により部分減算を行なうという計算をくり返していく。この場合、部分商 Q_j が 1 ビット幅であると、除算速度が遅いので一般に λ ビット (但し、 $\lambda = 2, 3, \dots$) 単位に部分除算をくり返していく。例えば近代科学社 1980 年発行、堀越他訳「コンピュータの高

演算方式」214～283頁、特に259頁8.4章「除数の逆数による除算」270頁8.8章「桁上げ保存形セル配列除算」を参照されたい。

従来、部分商 Q_j を求めるには、除数 D の上位桁数ビットの逆数を用いる等の手段により Q_j の近似値を求め、部分除算実行後にその補正を行なう手法がとられていた。この補正のため、除算器の制御が複雑となり、除算器の高速化に限界があると共に、補正回路の回路規模が大きくなり高いという欠点があった。

この発明は $M \div D$ の除算器において部分商 Q_j の算出を単純化することにより除算器の制御部の簡単化と除算の高速化を図ることを目的としている。

この発明を次の順序に従つてのべる。

1. この発明における除算器の原理
2. この発明の実施例
3. この発明の原理の数式表現
4. 数式表現の証明

(3)

$$(R_1 = R_{L+1} \cdot 2^{L+1} + \sum_{j=1}^L M_j \cdot 2^{(j-1)L} - D \sum_{j=1}^L Q_j \cdot 2^{(j-1)L})$$

$$\therefore R_1 = M - D \cdot Q_x \quad (5)$$

$$\text{但し } Q_x = \sum_{j=1}^L Q_j \cdot 2^{(j-1)L} \quad (6)$$

$$0 \leq R_1 < D \quad (7)$$

Q_j を式(2)'から求めるのは計算時間が多くなる。従つて Q_j の簡単な算出法があれば除算 $M \div D$ の商 Q 、剰除 R は $Q = Q_x$ 、 $R = R_1$ として求めることができる。

1.2 切捨演算による Q_j の算出

Q_j の算出法として式(2)、式(3)の各々の項の下位 m ビットを切捨る計算法を考える。但し $m \geq 1$ とする。

2の補数で表現した数 x に対して下位 m ビットの切捨演算は $[x \cdot 2^{-m}]$ として表現できる。こゝで $[x]$ は x を超えない最大整数を示すガウスの記号である。

式(2)、式(3)を以下により求め Q_j を求める近似

(5)

1. この発明における除算器の原理

1.1 除算方法

$M \div D$ の除算方法として次の簡化式で示す計算法を考える。

$$R_{L+1} = 0 \quad (1)$$

$j = L, L-1, \dots, 2, 1$ に対して

$$R_j = 2^L \cdot R_{j+1} + M_j - Q_j \cdot D \quad (2)$$

$$0 \leq R_j < D \quad (3)$$

$$M = \sum_{j=1}^L M_j \cdot 2^{(j-1)L} \quad (4)$$

$$\text{但し } M_j = \sum_{n=0}^{2^L-1} d_{(j-1)L+n} \cdot d_{(j-1)L+n} = 0 \text{ 又は } 1$$

式(2)において、 $-Q_j \cdot D$ は部分除算、 Q_j は部分商である。 Q_j は次式(2)'で求める。

$$Q_j = \left[\frac{2^L \cdot R_{j+1} + M_j}{D} \right] \quad (2)'$$

式(2)に $\sum_{j=1}^L 2^{(j-1)L}$ を掛算すると式(1)を考慮して

(4)

式とする。こゝで $S \cdot 1$ 、 S は定数である。

$$S \leq [(2^L \cdot R_{j+1}) \cdot 2^{-m}] + [(-Q_j) \cdot D \cdot 2^{-m}] + S \cdot 1 < [D \cdot 2^{-m}]$$

こゝで M_j は L ビット幅であるから m ビットの切捨て($m \geq 1$)の結果0となる。

上式は更に次式によつて近似表現する。但し S は定数である。

$$[(2^L \cdot R_{j+1}) \cdot 2^{-m}] + [(-Q_j) \cdot D \cdot 2^{-m}] + S \geq 0 \quad (8)$$

$$[(2^L \cdot R_{j+1}) \cdot 2^{-m}] + [(-Q_{j-1}) \cdot D \cdot 2^{-m}] + S < 0 \quad (9)$$

この式(8)、(9)を同時に満足する Q_j を求めればよい。

1.3 キャリア蓄積型加算器の利用

この発明の除算は式(2)の加算をキャリア蓄積型加算器を利用することを特徴とする。

キャリア蓄積型加算器はその出力 R_j の下位 m ビットの切捨演算を行なうと加算器内部のキャリアが上位桁に伝播しないための誤差 α_j がランダム

(6)

に発生する。

ここで $\alpha_j = 0$ 又は 1 である。

α_j を考慮して式(8), (9)を次のように変え、 Q_j を求める近似式とする。なおキャリヤ蓄積型加算器において誤差 α_j が生ずる理由は後ほど詳しくのべる。

$$[(2^j \cdot R_{j+1})2^{-m}] + [(-Q_j) \cdot D \cdot 2^{-m}] + S + \alpha_j \geq 0 \quad (10)$$

$$[(2^j \cdot R_{j+1})2^{-m}] + [(-Q_j - 1) \cdot D \cdot 2^{-m}] + S + \alpha_j < 0 \quad (11)$$

上式において、

$$\left. \begin{aligned} [(-Q_j) \cdot D \cdot 2^{-m}] &\div -Q_j \cdot [D \cdot 2^{-m}] \\ [(-Q_j - 1) \cdot D \cdot 2^{-m}] &\div -(Q_j + 1) [D \cdot 2^{-m}] \end{aligned} \right\}$$

と近似することにより次式をうる。

$$\left[\begin{aligned} [(2^j \cdot R_{j+1})2^{-m}] - Q_j [D \cdot 2^{-m}] + S + \alpha_j &\geq 0 \\ [(2^j \cdot R_{j+1})2^{-m}] - (Q_j + 1) [D \cdot 2^{-m}] + S + \alpha_j &< 0 \\ \frac{[(2^j \cdot R_{j+1})2^{-m}] + S + \alpha_j}{[D \cdot 2^{-m}]} - 1 &< Q_j \leq \end{aligned} \right] \quad (7)$$

1.5 Q_j の別解法

式(12)は除算を含むが、除算は一般に計算時間が長くなり易いので、これを乗算に変えたと式が得られる。

$$Q_j + \delta_{*,j} = \begin{cases} [X_1 \cdot v \cdot 2^{-11}] + 1 & X_1 > 0 \text{ のとき} \\ [X_1 \cdot v \cdot 2^{-11}] & X_1 \leq 0 \text{ のとき} \end{cases} \quad (18)$$

$$\text{但し } \delta_{*,j} = 0, 1 \quad (19)$$

$$X_1 = [(2^j \cdot R_{j+1})2^{-m}] + 24 + \alpha_j \quad (20)$$

$$v = \left[\frac{2^{11}}{[D \cdot 2^{-m}]} \right] \quad (21)$$

ここで $\delta_{*,j}$ の値は $0, 1$ の値であるが、その値を知ることはできないことである。しかし Q_j の代わりに $Q_j + \delta_{*,j}$ の値によつて式(2)から R_j を求めると $\delta_{*,j} = 1$ の場合 R_j の値が $-D$ だけ増えることから R_j の範囲は次式で与えられることが証明できる。

$$-D - \frac{21}{64} D \leq R_j < D \quad (22)$$

(9)

$$\left[\frac{[(2^j \cdot R_{j+1})2^{-m}] + S + \alpha_j}{[D \cdot 2^{-m}]} \right] \quad (12)$$

1.4 R_j と Q_j の範囲

式(12)は近似式である。このため R_j の範囲は式(3)を離脱するので実数 t を用いて R_{j+1} の範囲を次のように仮定する。

$$-t \cdot D \leq R_{j+1} < D \quad (13)$$

次に式(10), (11)で用いた m を用いて、整数 K を次式により定義する。

$$1 \leq \frac{D}{2^{m+K}} < 2 \quad (14)$$

ここで t, S を例えば $t = 1 + \frac{21}{64}$ 、 $S = 24$ と定めると R_{j+1} の範囲は次のようになる。

$$-D - \frac{21}{64} D \leq R_{j+1} < D \quad (15)$$

(8)

式(15)と式(22)とを比較すると R_{j+1} と R_j の範囲は一致する。

1.6 剰余 R と商 Q の求め方

また $j = \ell$ とすると式(1)より $R_{\ell+1} = 0$ であり、この条件は式(15)を満たすから式(18)を用いて $Q_{\ell} + \delta_{*,\ell}$ を求め、キャリヤ蓄積型加算器を用いて式(2)により R_{ℓ} を求めることができる。 R_{ℓ} は式(22)の条件を満たす。

R_{ℓ} は式(15)の範囲に収まっているから、 $j = \ell - 1$ としたとき、式(18)により再び $Q_{\ell-1} + \delta_{*,\ell-1}$ を求め、同様に $R_{\ell-1}$ を求めることができる。

以下、同様に $j = \ell - 2, \dots, 2, 1$ とし $Q_j + \delta_{*,j}$ と R_j を求めることができる。 R_1 は式(22)を満たす。

以下、式(5), (6), (15)を再掲する。但し(6)は $Q_x \rightarrow Q_{x'}$ とする。

$$R_1 = M - D \cdot Q_{x'} \quad (23)$$

$$Q_{x'} = \sum_{j=\ell}^1 (Q_j + \delta_{*,j}) 2^{(j-1)} \quad (24)$$

(10)

$$-D - \frac{21}{64} D \leq R_1 < D \quad (25)$$

一方、商 Q 、剰余 R とは次の関係がある。

$$M = Q \cdot D + R \quad (26)$$

$$0 \leq R < D \quad (27)$$

式(23)～(27)より次式が成立する。

$$R = R_1 + \delta \cdot n \quad (28)$$

$$Q = \sum_{j=1}^L (Q_j + \delta_{*,j}) 2^{(j-1)L-\delta} \quad (29)$$

$$\delta = \begin{cases} 2 : R_1 < -D \text{ のとき} \\ 1 : -D \leq R_1 < 0 \text{ のとき} \\ 0 : R_1 \geq 0 \text{ のとき} \end{cases} \quad (30)$$

1.7 この発明の原理の拡張

式のパラメータ t, S, K 等を適当に定めるとこの発明の原理に基づく除算の様々な表現ができるが、これらについてこの発明の原理の数式表現として接述する。

(11)

$$X = [(2^4 \cdot Q_{j+1} \cdot 2^{-18}) + [(2^4 \cdot H_{j+1}) \cdot 2^{-18}] + 24 + \alpha_j] \quad (E-5)$$

$$\alpha_j = 0, 1 \quad (E-6)$$

$$v = \left[\frac{2^{18}}{[D \cdot 2^{-18}]} \right] \text{ 但し } 2^{18} \leq D < 2^{19} \quad (E-8)$$

$$-21 \leq Q_j \leq 16 \quad (E-9)$$

$$G_j + H_j = 2^4 \cdot G_{j+1} + 2^4 \cdot H_{j+1} + M_j - (Q_j + \delta_{*,j}) \cdot D \quad (E-10)$$

$$-D - \frac{21}{64} D \leq G_j + H_j < D \quad (E-11)$$

$$R = G_1 + H_1 + \delta \cdot D \quad (E-12)$$

$$Q = \sum_{j=1}^L (Q_j + \delta_{*,j}) 2^{(j-1)L-\delta} \quad (E-13)$$

$$\delta = \begin{cases} 2 : G_1 + H_1 < -D \text{ のとき} \\ 1 : -D \leq G_1 + H_1 < 0 \text{ のとき} \\ 0 : G_1 + H_1 \geq 0 \text{ のとき} \end{cases} \quad (E-14)$$

次にこの発明の実施例を述べる。

第1図はこの発明の実施例を示し、4入力2出

(13)

2. この発明の実施例

この発明の原理に基づく除算器の実施例を示す前に実施例における除算の計算式をまとめて示す。

なお、式(E-6)～式(E-7)の $\alpha_j, \delta_{*,j}$ は乱数で自然に発生してしまうため、式(E-4)、式(E-5)の加算において $\alpha_j, \delta_{*,j}$ を加算する回路等を作る必要はない。また $L=4$ の場合を示す。

$$M = \sum_{j=1}^L M_j \cdot 2^{4(j-1)} \quad (E-1)$$

$$\text{但し、} M_j = \sum_{n=0}^L \delta_{*,j} 2^{4(j-1)+n} \cdot 2^n$$

$$R_j = G_j + H_j, R_{j+1} = G_{j+1} + H_{j+1} \text{ として、}$$

$$G_{L+1} = 0, H_{L+1} = 0 \quad (E-2)$$

$$-D - \frac{21}{64} D \leq G_{j+1} + H_{j+1} < D \quad (E-3)$$

$$Q_j' = Q_j + \delta_{*,j} = \begin{cases} [X \cdot v \cdot 2^{-18}] + 1 & X \geq 0 \text{ のとき} \\ [X \cdot v \cdot 2^{-18}] & X < 0 \text{ のとき} \end{cases} \quad (E-4)$$

$$\text{但し、} \delta_{*,j} = 0, 1$$

(12)

力のキャリア蓄積型加算器1は式(E-10)の加算を行なうもので、 $2^4 \cdot H_{j+1}$ を信号線24から、 $2^4 \cdot G_{j+1}$ を信号線25から、 M_j を信号線22から、 $-(Q_j + \delta_{*,j}) \cdot D$ を信号線23から、それぞれ2進数表示のデータとして入力し、加算を実行して $H_j + G_j$ を求め H_j をレジスタ2に、 G_j をレジスタ3にそれぞれ値信号線18, 19を通じて出力する。加算器1をCSAと命名する。なお H_{j+1} は H_j の j の値が1つ大きいものを、 G_{j+1} は G_j の j の値が1つ大きいものを意味する。

レジスタ2, 3の内容の H_j, G_j は信号線38, 39を通じてキャリア伝搬型加算器4に入力されて加算され、その加算結果は値信号線34から、加算結果の符号は正及び零のとき0、負のとき1として信号線33に出力される。

M_j 生成部5は式(E-1)に示す M を、制御信号線41が1となると入力信号線35から入力し、その内部のレジスタに設定しておき、制御信号線17からのクロック信号に応じて M_j 、但し、 $j=L, L-1, \dots, 1$ を生成して信号線22に出力す

(14)

る。但し、制御信号線15の信号が1となるとMjを生成せず0を出力する。レジスタ6は制御信号線41が1となると除数Dを信号線36から入力し、Dの値を保持し続ける。

Qj計算部7は信号線30からレジスタ6のDを入力して式(E-8)のvの値を求めて保持し、式(E-5)のHj+1を信号線27から、Gj+1を信号線28から、定数の24を信号線29を通じ設定部10から入力し、Xを求め、更に式(E-4)の右辺の計算を行なつてQj+δ*,jを求め、信号線31,32に出力する。設定部10には2進数表示の定数24が設定され信号線29に出力し続ける。-Qj・D計算部8はレジスタ6のDを信号線26から、(Qj+δ*,j)を信号線31から入力し、-(Qj+δ*,j)×Dを計算して信号線23に出力する。

商計算部9は制御信号線16の制御信号により(Qj+δ*,j)の累和を求める内部レジスタをクリアし、制御信号線17からのクロックに同期して信号線32より入力される(Qj+δ*,j)につき

(15)

される。同時に制御信号線16上のクリア信号52がオンとなり、レジスタ2,3と商計算部9の(Qj+δ*,j)の累和を求める内部レジスタをクリアする。これは式(E-2)の実行と、式(E-13)の計算の準備に相当する。

次に制御部11はクロック信号53をj=2, 1, ..., 1に対応してクロック54, 55, ..., 56を順次出力する。するとQj計算部7では式(E-4)~(E-8)に基づいて、Qj+δ*,jを求め、更に-Qj・D計算部8で-(Qj+δ*,j)Dを求め、次にキャリヤ蓄積型加算器1は信号線24, 25, 22, 23からそれぞれ2⁴・Hj+1, 2⁴・Gj+1, Mj, -(Qj+δ*,j)Dを入力し、式(E-10)の加算を行ない、Hj+Gjを求め、その値をレジスタ2と3に分けて出力する動作をj=2, 1, ..., 1について順次行なう。

HjとGjの2つの値は常にキャリヤ伝搬型加算器4に入力されているのでRiの計算後、キャリヤの伝搬時間57を経過した後、信号線33からRiの加算結果の符号を時刻58で調べる。Ri<0の

(17)

$Q' = \sum_{j=1}^{\delta} (Q_j + \delta^*, j) 2^{4(j-1)}$ の計算を行ない、制御信号線15の補正指示信号に従つて $Q = Q' - \delta$ 、但し $\delta = 0, 1, 2$ の補正計算を行ない、この結果得られたQの値を信号線40から出力する。補正計算指示信号が制御信号線15から出されるとMj生成部5はMjの生成を中止して0を出力し、-Qj・D生成部8は第1回目の補正計算指示信号で $\lambda = 4$ であるから $+2^4 \cdot D$ を信号線23に出力し、第2回目の補正計算指示信号では $+2^3 \cdot D$ を信号線23に出力し、商計算部9は $Q' = \sum_{j=1}^{\delta} (Q_j + \delta^*, j) 2^{4(j-1)}$ で求めたQ'から補正計算指示信号が1となる都度 $Q' - 1$ を求め、即ち $Q = Q' - \delta$ 、 $\delta = 0, 1, 2$ を求める。制御部11から各制御信号線に制御信号、クロックなどを出す。

第2図は第1図に示した実施例の動作を説明するタイミング図である。制御信号線12から除算開始指示信号50を入力すると、制御信号線41からMとDの入力指示信号51がオンとなり、Mj生成部5及びレジスタ6にそれぞれMとDが設定

(16)

場合、制御部11は第1回目の補正計算指示信号59を制御信号線15から出力し、同時にクロック信号60をオンとする。加算器CSA1の入力はj=2, 2-1, ..., 1とクロックが進むとそれぞれ2^λ=2⁴倍される樹造になつてゐるから第1回目の補正計算指示信号59が出たのちは、-Qj・D計算部8から2^λ・Dが、Mj生成部5から0が加算器CSA1に入力され、2^λ・Ri+2^λ・D+0=2^λ(Ri+D)の加算がされる。これは式(E-14)で $\delta = 1$ に相当する。

次に一定時間61の後、2^λ(Ri+D)の加算結果の符号を時点62で調べ、(Ri+D)≥0の場合は計算が全て終了であるので除算終了表示の制御信号線14から信号63で外部に知らせる。(Ri+D)<0のときは第1回目の補正計算と同様な加算を行つが、信号線23からは2^{2λ}・Dを入力して2^λ(Ri+D)・2^λ+2^{2λ}・D=2^{2λ}(Ri+2・D)を求める。これは式(E-14)で $\delta = 2$ に相当する。補正計算は高々2回で終了する。 $\delta = 0, 1, 2$ の区別は制御信号線13から外部に知らされる。

(18)

このような構造になつているから整数 M と D を入力し、 $M \div D$ の商 Q 、剰余 R を求めることができる。

第3図は1ビット全加算器の記法を示したもので入力信号線80, 81, 82からそれぞれ0又は1のデータを入力し、それらの加算結果を2進表示して 2^1 の位を83から、 2^0 の位を84から出力する。

第4図は加算器CSA1の具体例を示す。

信号線23中の上位の $L' \times 5$ ビットは信号線230に与えられ、下位5ビットは信号線231に与えられる。信号線230中の上位の $L' \times 3$ のデータは加算器500で加算され、信号線231のデータと、信号線22の下位4ビットが与えられる信号線220のデータと、信号線24中の下位5ビットが除かれた信号線240のデータと、信号線25中の下位4ビットが除かれた信号線250のデータと、信号線230の下位の L' ビットのデータとが加算器501で加算され、その加算結果と、信号線230の下位より $L'+1 \sim 2$ L' ビット

(19)

のデータとが加算器502で加算され、この加算器502の一方の出力と、加算器500の加算結果とが加算され、更にその加算結果と、加算器502の他方の加算結果とが加算器504で加算される。加算器500～504はそれぞれ1ビット全加算器490が L' 個並べられ、 L' ビットの3つのデータが入力され、各対応ビットが全加算器490でそれぞれ加算され、その加算結果の L' ビットと、その上位1ビットを除去し、代つて最下位に0を1ビット加えて L' ビットとしたものが出力されるものである。

このような構造になつているから L' ビットで表現して、信号線22, 23, 24, 25から4種の2進数データを入力し、それらの加算を行ない加算結果を2種の2進数データとして出力することができる。

第5図は4のキャリア伝播型加算器4の具体例を示す。信号線380, 390, 340はそれぞれ信号線38, 39, 34に対応する。410は1ビット全加算器である。

(20)

第6図はQJ計算部7の具体例を示す。

第4図と同様なキャリア蓄積型加算器600、 D の値から式(E-8)に基づいて v を求める組合せ回路、又はROMからなる回路620、 v の値を格納するレジスタ630、信号線635, 636と639の積を求める乗算器640、信号線641, 642上のデータの加算を行なうキャリア伝播型加算器650、信号線641, 642のデータの加算を行なうキャリア蓄積型加算器662、その加算結果を加算するキャリア伝播型加算器660などが設けられる。乗算器640はAND素子とキャリア蓄積型加算器を組合せてできることは自明である。こゝで乗算器640の加算結果の下位13ビットは切捨てられ、信号線641, 642に出力する。

このような構造になつているから、信号線27, 28, 29からそれぞれ $[(2^4 \cdot H_j + 1) 2^{-1^8}]$, $[(2^4 \cdot G_j + 1) 2^{-1^8}]$ と実数24を入力し、式(E-5)に基づいて X を求め、レジスタ630中の v と $X \cdot v$ の積を乗算器640で求め、 $[X \cdot v \cdot 2^{-1^8}]$

(21)

の値を求め、 $X > 0$, $X \leq 0$ に応じて式(E-4)の計算を行ない $Q_j + \delta^*$, j の値を信号線660から1クロックで即ち高速に求めることができる。なお信号線661は信号線641, 642上の信号の加算結果の符号を示し、第5図中の信号線33と対応し、この符号に応じて加算器660又は650の出力が信号線660へ出力される。

3. この発明の原理の数式表現

この発明の除算の原理を定理及び定理の系として数式表現により示す。

3.1 除算定理

整数の除算 $M \div D$ の商 Q 、剰余 R は式(100)～式(105)を前提に式(106)～式(114)に示す漸化式を $j = 2, 2-1, \dots, 2, 1$ とくり返して得られる Q_j と G_j, H_j を基に、式(115)～式(117)により求めることができる。こゝで $M, D, G_j, H_j, G_j + 1, H_j + 1$ は変数、 m, K, l は定数でいずれも整数であり、 α_j はその値が j と共に不規則に変わる乱数である。

(22)

$$1 \leq \frac{D}{2^{m+K}} < 2 \quad (100)$$

$$1 \leq K \quad (101)$$

$$1 = 1, 2, 3, \dots \quad (102)$$

$$2^1 + S + 2 \leq 2^K \quad (103)$$

$$-3 + S - [2^1 \cdot t] \geq 0, [2^1 t] \geq 1$$

$$-t \leq -(S + 2^1 + 2) \frac{1}{2^K} - 1, 0 < \frac{(S + 2^1 + 2)}{2^K} \leq 1$$

$$-2^{K+1+1} < -1 + [(1-t) \cdot 2^{K+1+1}] + S + \alpha_j, S + \alpha_j < 2^{K+1+1} \quad (104)$$

$$M = \sum_{j=1}^{\ell} M_j \cdot 2^{(j-1)\lambda}, \text{但し } M_j = \sum_{\mu=0}^{\lambda-1} \delta_{\mu}(j-1) \lambda + \mu \cdot 2^{\mu},$$

$$\delta_{(j-1)\lambda + \mu} = 0 \text{ 又は } 1 \quad (105)$$

$$R_{\lambda+1} = 0 \quad (106)$$

$$-t \cdot D \leq G_{j+1} + H_{j+1} < D \quad (107)$$

$$Q_j + \delta_{*,j} = \begin{cases} [X \cdot v \cdot 2^{-(K+1+2)}] + 1 & X \geq 0 \\ [X \cdot v \cdot 2^{-(K+1+2)}] & X < 0 \end{cases} \quad (108)$$

(23)

$$R_j = G_j + H_j \quad (118)$$

$$R_{j+1} = G_{j+1} + H_{j+1} \quad (119)$$

3.2 この発明の具体例

除算の定理において、定数を具体的に定めることにより除算の具体的な方法を定めることができることを示す。

定数は式(100)～(105)を満たす例として次のとおり定める。

$$m = 56, K = 7, \lambda = 4, t = 1 + \frac{21}{64}, S = 24$$

$$M = \sum_{j=1}^{\ell} M_j \cdot 2^4(j-1) \quad (300)$$

$$\text{但し, } M_j = \sum_{\mu=0}^{\lambda-1} \delta_{\mu}(j-1) \lambda + \mu \cdot 2^{\mu}$$

$$G_{\lambda+1} = 0, H_{\lambda+1} = 0 \quad (301)$$

$$-D - \frac{21}{64} D \leq G_{j+1} + H_{j+1} < D \quad (302)$$

$$Q_j + \delta_{*,j} = \begin{cases} [X' \cdot v \cdot 2^{-18}] + 1 & X' > 0 \text{ のとき} \\ [X' \cdot v \cdot 2^{-18}] & X' \leq 0 \text{ のとき} \end{cases} \quad (303)$$

(25)

$$\delta_{*,j} = 0 \text{ 又は } 1 \quad (109)$$

$$X = [(2^1 \cdot G_{j+1}) 2^{-m}] + [(2^1 \cdot H_{j+1}) 2^{-m}] + S + \alpha_j \quad (110)$$

但し、 $\alpha_j = 0, 1$

$$v = \left[\frac{2^{K+1+2}}{[D \cdot 2^{-m}]} \right] \quad (111)$$

$$-[t \cdot 2^1] \leq Q_j \leq 2^1 \text{ 但し, } t \geq 1 \quad (112)$$

$$G_j + H_j = 2^1(G_{j+1} + H_{j+1}) + M_j - (Q_j + \delta_{*,j}) \cdot D \quad (113)$$

$$-(S + 2^1 + 2) \frac{D}{2^K} - D \leq G_j + H_j < D + (3 - S + [2^1 t]) 2^m \quad (114)$$

$$R = G_1 + H_1 + \delta \cdot D \quad (115)$$

$$Q_j = \sum_{j=1}^{\ell} (Q_j + \delta_{*,j}) 2^{(j-1)\lambda} \quad (116)$$

$$\delta = \begin{cases} 2 & G_1 + H_1 < -D \text{ のとき} \\ 1 & -D \leq G_1 + H_1 < 0 \text{ のとき} \\ 0 & G_1 + H_1 \geq 0 \text{ のとき} \end{cases} \quad (117)$$

なおこの発明の原簿で述べた R_j, R_{j+1} は次式で定義される。

(24)

但し、 $\delta_{*,j} = 0, 1$

$$X' = [(2^4 \cdot G_{j+1}) 2^{-86}] + [(2^4 \cdot H_{j+1}) \cdot 2^{-86}] + 24 + \alpha_j \quad (304)$$

$$\alpha_j = 0 \text{ 又は } 1 \quad (305)$$

$$v = \left[\frac{2^{18}}{[D \cdot 2^{-86}]} \right] \text{ 但し, } 2^{86} \leq D < 2^{87} \quad (307)$$

$$-21 \leq Q_j \leq 16 \quad (308)$$

$$G_j + H_j = 2^4(G_{j+1} + H_{j+1}) + M_j - (Q_j + \delta_{*,j}) \cdot D \quad (309)$$

$$-D - \frac{21}{64} D \leq G_j + H_j \leq D \quad (310)$$

$$R = G_1 + H_1 + \delta \cdot D \quad (311)$$

$$Q_j = \sum_{j=1}^{\ell} (Q_j + \delta_{*,j}) 2^4(j-1) \quad (312)$$

$$\delta = \begin{cases} 2 & G_1 + H_1 < -D \text{ のとき} \\ 1 & -D \leq G_1 + H_1 < 0 \text{ のとき} \\ 0 & G_1 + H_1 \geq 0 \text{ のとき} \end{cases} \quad (313)$$

(26)

4. この発明の原理の数式表現の証明

4.1 準備

定数 x_1 、整数 φ に対し次式が成立する。但し $r\varphi$ は整数である。

$$\sum_{i=1}^{\varphi} [x_1] = [\sum_{i=1}^{\varphi} x_1] - r\varphi \quad (200)$$

$$0 \leq r\varphi \leq \varphi - 1$$

$$[x_1] - [x_2] = [x_1 - x_2] + \delta_1 \quad (201)$$

$$\delta_1 = 0, 1$$

また、次の略記号を定める。

$$\left. \begin{aligned} h_{j+1} &= [(2^{\lambda} H_{j+1}) 2^{-m}] \\ g_{j+1} &= [(2^{\lambda} G_{j+1}) 2^{-m}] \\ h_j &= [(2^{\lambda} H_j) \cdot 2^{-m}] \\ g_j &= [(2^{\lambda} G_j) \cdot 2^{-m}] \end{aligned} \right\} \quad (202)$$

$$(107) \times 2^{\lambda}$$

$$-2^{\lambda} \cdot t \cdot D \leq 2^{\lambda} \cdot G_{j+1} + 2^{\lambda} \cdot H_{j+1} < 2^{\lambda} \cdot D$$

$$\therefore [(-2^{\lambda} \cdot t) D \cdot 2^{-m}] \leq [(2^{\lambda} G_{j+1} + 2^{\lambda} \cdot H_{j+1}) \cdot 2^{-m}]$$

$$(27)$$

$$t = 1 + \varepsilon \quad \text{但し } \varepsilon \geq 0 \quad (208)$$

とかくと、

$$-2^{K+\lambda+1} - 1 + [-\varepsilon \cdot 2^{K+\lambda+1}] < g_{j+1} + h_{j+1} < 2^{K+\lambda+1}$$

両辺に $S + \alpha_j$ を加える

$$-2^{K+\lambda+1} - 1 + [-\varepsilon \cdot 2^{K+\lambda+1}] + S + \alpha_j < X < 2^{K+\lambda+1} + S + \alpha_j$$

$$-1 < \frac{-2^{K+\lambda+1} - 1 + [-\varepsilon \cdot 2^{K+\lambda+1}] + S + \alpha_j}{2^{K+\lambda+1}} < \frac{X}{2^{K+\lambda+1}}$$

$$< \frac{2^{K+\lambda+1} + S + \alpha_j}{2^{K+\lambda+1}} < 1$$

式 (104) より

$$-1 < \frac{X}{2^{K+\lambda+1}} < 1 \quad (209)$$

次に

$$A = [X \cdot v \cdot 2^{-(K+\lambda+s)}] - \left[\frac{X}{[D \cdot 2^{-m}]} \right]$$

を求める。式 (111) により v を代入して、公式 (201) を適用

$$(29)$$

$$< [(2^{\lambda} \cdot D) 2^{-m}]$$

式 (200) より

$$[(-2^{\lambda} \cdot t) D \cdot 2^{-m}] - r_s \leq g_{j+1} + h_{j+1} < [(2^{\lambda} \cdot D) 2^{-m}] - r_s$$

但し、 $r_s = 0, 1$

左辺： $r_s = 1$ で最小

$$[(-2^{\lambda} \cdot t) D \cdot 2^{-m}] - 1 \leq g_{j+1} + h_{j+1} \quad (203)$$

右辺： $r_s = 0$ で最大

$$g_{j+1} + h_{j+1} < [(2^{\lambda} \cdot D) 2^{-m}] \quad (204)$$

$$\text{式 (100) より、} D \cdot 2^{-m} < 2^{K+1} \quad (205)$$

$$\therefore [2^{\lambda} \cdot D \cdot 2^{-m}] < 2^{K+\lambda+1} \quad (206)$$

式 (205) より、 $-2^{K+1} < -D \cdot 2^{-m}$

$$\therefore [-t \cdot 2^{K+\lambda+1}] < [-2^{\lambda} \cdot t \cdot D \cdot 2^{-m}] \quad (207)$$

式 (203), (204), (206), (207) より

$$-1 + [-t \cdot 2^{K+\lambda+1}] < g_{j+1} + h_{j+1} < 2^{K+\lambda+1}$$

$$(28)$$

$$A = [X \cdot \left[\frac{2^{K+\lambda+s}}{[D \cdot 2^{-m}]} \right] \cdot 2^{-(K+\lambda+s)} - \frac{X}{[D \cdot 2^{-m}]}] + \delta_s$$

$$\delta_s = 0, 1$$

$$A = \left[\frac{X}{2^{K+\lambda+s}} \left\{ \left[\frac{2^{K+\lambda+s}}{[D \cdot 2^{-m}]} \right] - \frac{2^{K+\lambda+s}}{[D \cdot 2^{-m}]} \right\} \right] + \delta_s$$

$$\therefore \varepsilon' = \left[\frac{2^{K+\lambda+s}}{[D \cdot 2^{-m}]} \right] + \frac{2^{K+\lambda+s}}{[D \cdot 2^{-m}]} \quad (210)$$

とかくと、

$$A = \left[\frac{-X}{2^{K+\lambda+s}} \cdot \varepsilon' \right] + \delta_s \quad (211)$$

但し、 $0 \leq \varepsilon' < 1$

式 (209) ~ (211) から

$$A = \begin{cases} -1 + \delta_s & X \geq 0 \\ \delta_s & X < 0 \end{cases} \quad (212)$$

$$\therefore \left[\frac{X}{[D \cdot 2^{-m}]} \right] + \delta_s = \begin{cases} [X \cdot v \cdot 2^{-(K+\lambda+s)}] + 1 & X \geq 0 \\ [X \cdot v \cdot 2^{-(K+\lambda+s)}] & X < 0 \end{cases} \quad (213)$$

$$(30)$$

よつて $\delta = \delta_0, j$ と選ぶと式 (108) より次式が成立。

$$\therefore Q_j = \left[\frac{X}{[D \cdot 2^{-m}]} \right] \quad (214)$$

$$\frac{X}{[D \cdot 2^{-m}]} - 1 < Q_j \leq \frac{X}{[D \cdot 2^{-m}]}$$

$$X + (-Q_j) \cdot [D \cdot 2^{-m}] \geq 0 \quad (215)$$

$$X + (-Q_j - 1) \cdot [D \cdot 2^{-m}] < 0 \quad (216)$$

一方、整数 I 、実数 x に対し次の式が成立する。

$$[I+x] = I + [x] \quad (217)$$

X は整数であるから、式 (215) ~ (216) に上の公式を適用すると、

$$X + [(-Q_j)[D \cdot 2^{-m}]] \geq 0 \quad (218)$$

$$X + [(-Q_j - 1)[D \cdot 2^{-m}]] < 0 \quad (219)$$

一方、整数 I 、実数 $x > 0$ に対し P を整数として次式が成立する。

$$(31)$$

$$\text{但し、} 0 \leq P \leq I + 1 \quad (227)$$

4.1.1 Q_j の下限 (式 (112) の左辺)

$Q_j = -2^{\lambda} \cdot t$ とした式 (222) の左辺を U とおく、但し X は式 (110) を代入

$$g_j + i + h_j + i + S + \alpha_j + [2^{\lambda} t \cdot D \cdot 2^{-m}] + P_1 = U \quad (228)$$

式 (203) + (228)

$$[(-2^{\lambda} t)D \cdot 2^{-m}] - 1 + S + \alpha_j + [2^{\lambda} t \cdot D \cdot 2^{-m}] + P_1 \leq U$$

式 (200) を適用

$$\begin{aligned} -r_s - 1 + S + \alpha_j + P_1 &\leq U \\ r_s &= 0, 1 \end{aligned}$$

上式の左辺は $r_s = 1, \alpha_j = 0, P_1 = -I_1$ のとき最小となる。

$$\therefore -2 + S - I_1 \leq U$$

よつて、 $I_1 = [2^{\lambda} \cdot t]$ とおくと、

$$-2 + S - [2^{\lambda} \cdot t] \leq U$$

$$(33)$$

$$\left. \begin{aligned} [(-I) \cdot [x]] &= [(-I) \cdot x] + P' \\ \text{但し、} 0 \leq P' \leq I & \quad I \geq 0 \text{ のとき} \\ I \leq P' \leq 0 & \quad I \leq 0 \text{ のとき} \end{aligned} \right\} \quad (220)$$

式 (218) ~ 式 (219) において Q_j の範囲を次のとおり仮定し、公式 (220) を式 (218), (219) に適用する。

$$-I_1 \leq Q_j \leq I_1 \quad (221)$$

但し、 $-I_1 \leq -1, 0 \leq I_1$

(i) $Q_j < 0$ のとき

$$X + [(-Q_j) \cdot D \cdot 2^{-m}] + P_1 \geq 0 \quad (222)$$

$$X + [(-Q_j - 1) \cdot D \cdot 2^{-m}] + P_1 < 0 \quad (223)$$

$$\text{但し、} -I_1 \leq P_1 \leq 0 \quad (224)$$

(ii) $Q_j \geq 0$ のとき

$$X + [(-Q_j) \cdot D \cdot 2^{-m}] + P_1 \geq 0 \quad (225)$$

$$X + [(-Q_j - 1) \cdot D \cdot 2^{-m}] + P_1 < 0 \quad (226)$$

$$(32)$$

しかるに式 (104) より

$$1 \leq U \quad (229)$$

また、式 (104) より $-I_1 \leq -1$ の仮定は満たされている。また、 $Q_j \leq -2^{\lambda} \cdot t - 1$ のとき、式 (223) が成立しないのは明らかである。

$$\therefore -[2^{\lambda} \cdot t] \leq Q_j \quad (230)$$

4.1.2 Q_j の上限 (式 (112) の右辺)

$Q_j = 2^{\lambda}$ として式 (226) の左辺を V とおく、但し X は式 (110) を使う。

$$V = g_j + i + h_j + i + S + \alpha_j + [(-2^{\lambda} - 1) \cdot D \cdot 2^{-m}] + P_1 \quad (231)$$

式 (204) + 式 (231)

$$V < [2^{\lambda} \cdot D \cdot 2^{-m}] + [(-2^{\lambda} - 1) \cdot D \cdot 2^{-m}] + P_1 + S + \alpha_j$$

$$\therefore V < [(-D) \cdot 2^{-m}] + P_1 - r_s + S + \alpha_j \quad (232)$$

$$r_s = 0, 1$$

$$(34)$$

一方、式(100)より $-D \cdot 2^{-m} \leq -2^k$ が成立するから、上式の右辺は $[(-D) \cdot 2^{-m}] \leq -2^k, r_s=0, \alpha_j=1, P=s=I_s+1$ のとき最大となるから

$$V < -2^k + I_s + 1 + S + 1$$

よって $I_s = 2^l$ とすれば

$$V < -2^k + 2^l + S + 2$$

しかるに式(103)より

$$V < 0$$

また、 $Q_j \geq 2^l + 1$ とすると式(225)が成立しないのは明らかである。

$$\therefore Q_j \leq 2^l \quad (233)$$

また、 $I_s \geq 0$ の仮定は $l \geq 1$ より成立している。

4.1.3 $G_j + H_j$ の下限 (式(114)の左辺)

式(222)～(227)を1つにまとめる。但し X は式(110)を代入し、両辺に $[M_j \cdot 2^{-m}] = 0$ を加え

(35)

$$\therefore -(S + 2^l + 2) \cdot 2^m - \delta_{*,j} \cdot D \leq G_j + H_j$$

式(100)より $2^m \leq \frac{D}{2^k}$ が成立する。これに $\delta_{*,j}=1$ を代入

$$\therefore -(S + 2^l + 2) \cdot \frac{D}{2^k} - D \leq G_j + H_j \quad (236)$$

4.1.4 $G_j + H_j$ の上限 (式(114)の右辺)

前記と同様にして

$$[(G_j + H_j - D + \delta_{*,j} \cdot D) \cdot 2^{-m}] - r_s + S + \alpha_j + P < 0$$

$$[(G_j + H_j - D + \delta_{*,j} \cdot D) \cdot 2^{-m}] < r_s - S - \alpha_j - P$$

但し $r_s = 0, 1, 2, 3$

上記の左辺は $r_s = 3, \alpha_j = 0, P = -(2^l \cdot t)$ のとき最大となる。

$$\therefore [(G_j + H_j - D + \delta_{*,j} \cdot D) \cdot 2^{-m}] < 3 - S + [2^l \cdot t]$$

$$\therefore G_j + H_j < D - \delta_{*,j} \cdot D + (3 - S + [2^l \cdot t]) \cdot 2^m$$

上記の右辺は $\delta_{*,j} = 0$ のとき最大となる。

$$\therefore G_j + H_j < D + (3 - S + [2^l \cdot t]) \cdot 2^m \quad (237)$$

(37)

る。

$$G_{j+1} + H_{j+1} + S + \alpha_j + [M_j \cdot 2^{-m}] + [(-Q_j) \cdot D \cdot 2^{-m}] + P \geq 0 \quad (234)$$

$$G_{j+1} + H_{j+1} + S + \alpha_j + [M_j \cdot 2^{-m}] + [(-Q_{j-1}) \cdot D \cdot 2^{-m}] + P < 0 \quad (235)$$

$$\text{但し } \begin{cases} -I_s \leq P \leq 0 & Q_j < 0 \\ 0 \leq P \leq I_s + 1 & Q_j \geq 0 \end{cases} \text{ のとき}$$

式(234)に公式(200)を適用し、式(113)を代入

$$[(G_j + H_j + \delta_{*,j} \cdot D) \cdot 2^{-m}] - r_s + S + \alpha_j + P \geq 0$$

但し $r_s = 0, 1, 2, 3$

$$\therefore [(G_j + H_j + \delta_{*,j} \cdot D) \cdot 2^{-m}] \geq r_s - S - \alpha_j - P$$

上式の右辺は $r_s = 0, \alpha_j = 1, P = 2^l + 1$ のとき最小となる。

$$\therefore [(G_j + H_j + \delta_{*,j} \cdot D) \cdot 2^{-m}] \geq -(S + 1 + 2^l + 1)$$

$$\therefore -(S + 2^l + 2) \cdot 2^m \leq G_j + H_j + \delta_{*,j} \cdot D$$

(36)

4.1.5 $G_{j+1} + H_{j+1}$ の範囲と $G_j + H_j$ の範囲の関係

$G_{j+1} + H_{j+1}$ の範囲が $G_j + H_j$ を含むことを明らかにする。

上限の差を U_p とおくと

$$U_p = D - \{D + (3 - S + [2^l \cdot t]) \cdot 2^m\}$$

$$\therefore U_p = -(3 - S + [2^l \cdot t]) \cdot 2^m = (-3 + S - [2^l \cdot t]) \cdot 2^m$$

式(104)より、 $U_p \geq 0$

下限の差を Low とおくと、

$$Low = -(S + 2^l + 2) \cdot \frac{D}{2^k} - D + t \cdot D \geq 0$$

式(104)より

$$Low \geq 0$$

4.1.6 R と Q の算出

式(113)の両辺で $\sum_{j=1}^k 2^{(j-1)l}$ をとる。但し、 R_j は式(118)、 R_{j+1} は式(119)を代入

(38)

$$\sum_{j=1}^L R_j \cdot 2^{(j-1)L} = \sum_{j=1}^L R_{j+1} \cdot 2^{jL} + \sum_{j=1}^L M_j \cdot 2^{(j-1)L} \\ - D \sum_{j=1}^L (Q_j + \delta_j) \cdot 2^{(j-1)L}$$

$$\therefore R_1 = R_{L+1} \cdot 2^{L^2} + M - D \cdot Q_x \quad (240)$$

$$\text{但し、} Q_x = \sum_{j=1}^L (Q_j + \delta_{*,j}) \cdot 2^{(j-1)L}$$

よつて、式(106)より

$$R_1 = M - D \cdot Q_x \quad (241)$$

一方、 $M \div D$ の商 Q 、剰余 R は次の関係がある。

$$M = Q \times D + R \quad (242)$$

$$0 \leq R < D \quad (243)$$

式(241)、(242)より

$$R - R_1 = -D \cdot (Q - Q_x) \quad (244)$$

よつて R と R_1 の差は Q 、 Q_x が整数であるから、 D の整数倍の差があることがわかる。

R_1 の範囲は式(114)で $j=1$ として、

$$(39)$$

$$-2D < -\frac{(S+2^L+2)D}{2^k} \quad -D \leq R_1 < D \quad (245)$$

$$\therefore R = R_1 + \delta \cdot D \quad (246)$$

$$\text{但し、} \delta = \begin{cases} 2 & R_1 < -D \text{ のとき} \\ 1 & -D \leq R_1 < 0 \text{ のとき} \\ 0 & R_1 \geq 0 \end{cases} \quad (247)$$

式(246)→(244)に代入

$$Q = Q_x - \delta = \sum_{j=1}^L (Q_j + \delta_{*,j}) \cdot 2^{(j-1)L} \quad (248)$$

$M \div D$ の除算を求めるときの部分剰余 Q_j の代わりに $Q_j' = Q_j + \delta_{*,j}$ 、但し $\delta_{*,j} = 0, 1$ なる Q_j' によつて除算を進めることができる。しかも Q_j' を高速に求める回路は簡単に作れる。以上説明したように除算器の部分商計算部を簡単に作ることができ、除算を高速に行なえる利点がある。

4. 図面の簡単な説明

第1図はこの発明の一実施例を示すブロック図、第2図は第1図に示した実施例の動作を説明するタイミング図、第3図は1ビット加算器の回路の

$$(40)$$

説明図、第4図は第1図中のキャリア蓄積型加算器1の具体例を示す図、第5図は第1図中のキャリア伝播型加算器4の具体例を示す図、第6図は第1図中の Q_j 計算部7の具体例を示す図、第7図は第4図中の加算器500～504の一例を示す図である。

1：キャリア蓄積型加算器、2，3：レジスタ、
4：キャリア伝播型加算器、5： M_j 生成部、
6： D 蓄積用レジスタ、7： Q_j 計算部、8：
 $-Q_j D$ 計算部、9：商計算部、10：定数設定部、11：制御部。

特許出願人 日本電信電話公社

代理人 草野 卓

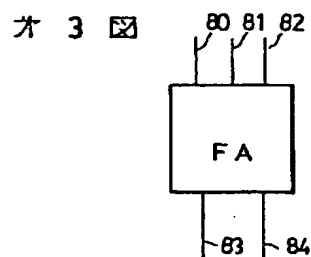
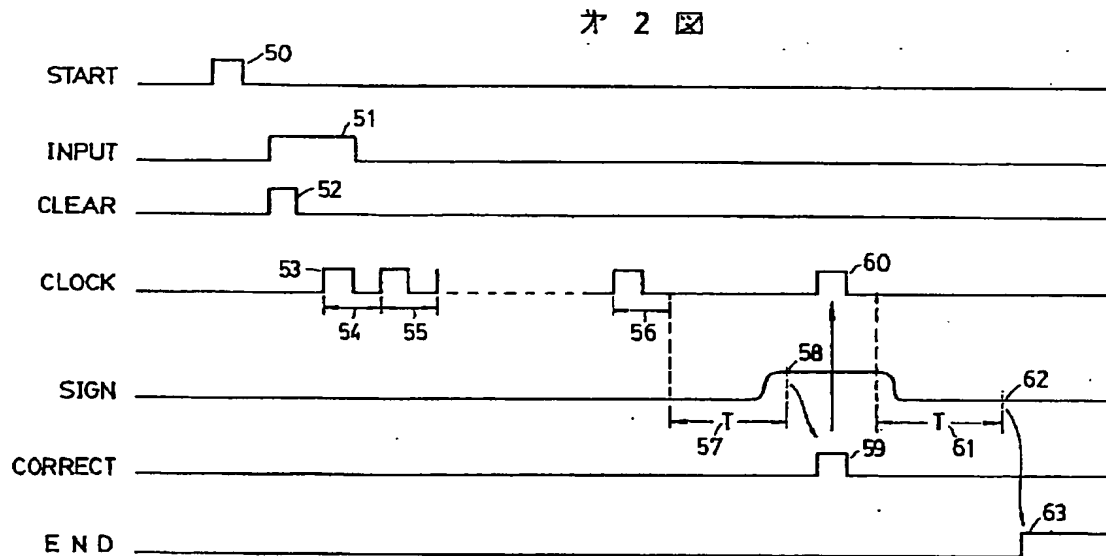
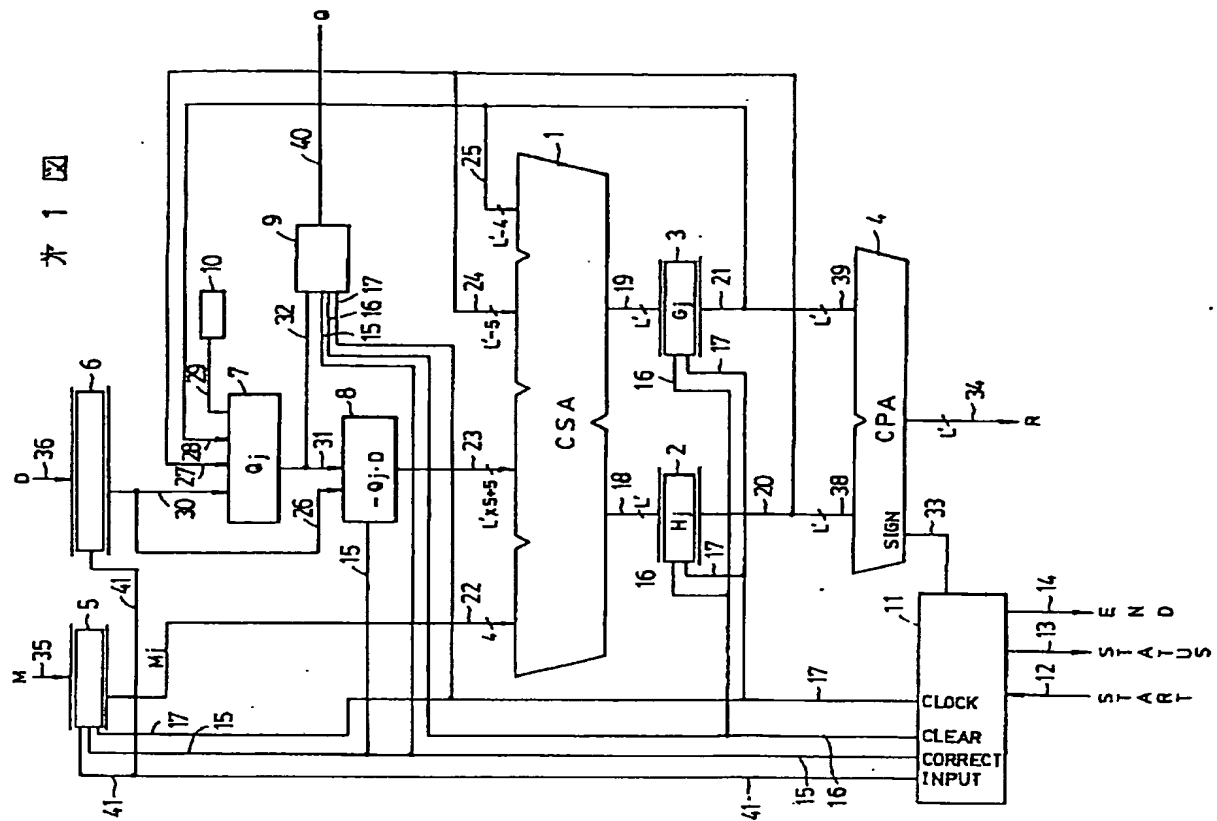


図 4

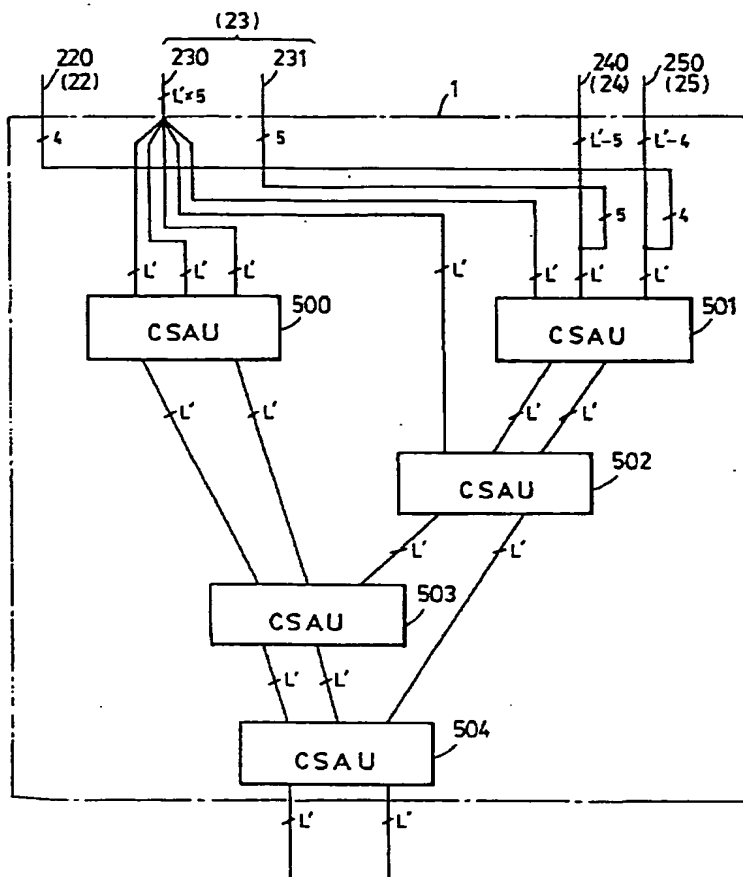


図 5

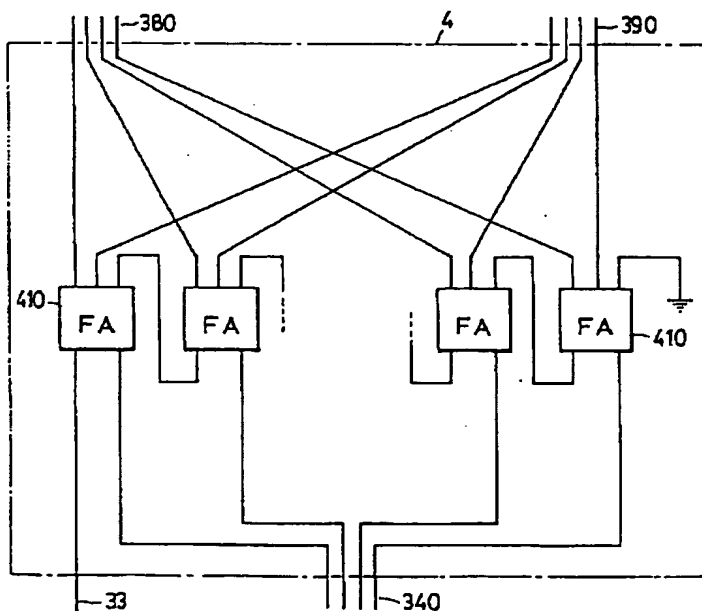


図 6

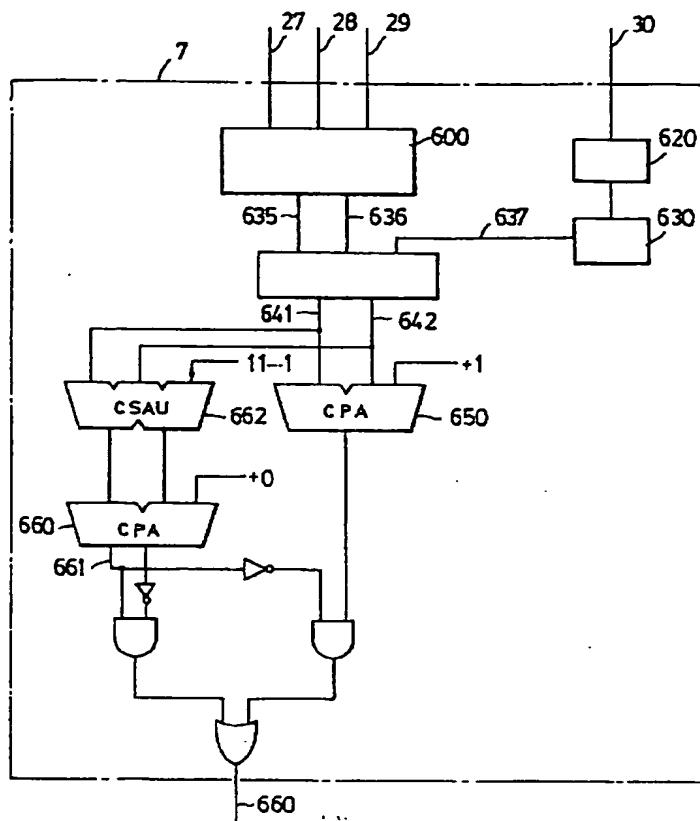


図 7

